



公益社団法人 日本山岳会

宮崎支部報

第71号



第35回宮崎ウェストン祭 11月3日-4日

久峯慧子

「日本近代登山の父」として知られるウォルター・ウェストン師が祖母山に登ったのは明治23年(1890年)11月6日(五ヶ所の旧家矢津田家に残る日記による)。それから129年を数える今年の11月3日～4日、35回目のウェストン祭が例年どおり五ヶ所の三秀台で開催された。地元住民や登山愛好家ら約150人が出席。日本山岳会からは北九州支部11名、東九州支部9名、熊本支部8名、宮崎支部18名であった。

式典は午後3時30分、地元の田原小学校児童による点鐘で始まった。高く澄んだ音色が祖母山を中心に紅葉を始めた山々に吸い込まれていった。それからウェストン師および山岳遭難者に対して黙とうを捧げた。次に田原小学校児童2名と支部会員2名による献花、その後高千穂町町長、宮崎支部長の挨拶、来賓挨拶、支部会員による詩の朗読、田原小学校の吉村悠萌君

による作文の朗読と続いた。元気なはっきりした声が清々しかった。朗読の中で「山頂からの景色はとてもきれいなので、また登りたい」と述べた。まずは地元の若人達に郷土の山「祖母山」を愛し続けていって欲しいと強く思った。この後全員で「ウェストン祭の歌」を周囲に響けと高らかに合唱した後、参加した田原小、中学校の児童への記念品贈呈が行われ、結びに五ヶ所公民館長の万歳三唱の発声をもって、式典は滞りなく終了した。式典終了後は、五ヶ瀬野菜出荷場での交流会に全員出席した。

<宮崎支部参加者18名> 拵恵子・久峯慧子・谷口敏子・服部澄子・橋口三枝子・蔵屋とよ・中武照子・*関谷克子(一般参加)・荒武八起・日高研二・末永軍朗・谷口菊美・武田芳雄・服部岩男・畑島良一・四宮林三・平田五男・川越政則・<北九州支部11名、熊本支部8名、東九州支部9名>

ウェストン師にささぐ

鎮魂と新たな誓い(抜粋)

宮崎支部元支部長 大谷優氏 作詩

11月3日 文化の日という美しい今日

新しい自然と風を受け私は今 あなたの碑の前に立つ

1890年 明治23年11月6日

あなたが30歳の時に登った祖母山

ここに山を愛し山を尊ぶ老若男女が相集う

あなたを思い あなたの前に追慕の鐘を鳴らし

感謝の花をささげる

イギリス人のあなたは 日本人のために大きな支えとなった

その人間愛にどれほど多くの教えを受けたことだろうか

日本の自然と山の美しさを自分の足で確かめながら

その深遠さとすばらしさを世界に紹介し...

あなたは正に日本近代登山の父であり

人道主義の先覚者 今 あなたの徳をしのび

新たな決意と実践を誓いたい

あなたの言った 風光明媚な「九州の軽井沢」は

ここ五ヶ所高原

晩秋の風は祖母山から 今 山里に下りていく

この詩は、毎年のウェストン祭において、支部会員によって朗読される。



拵会員による「ウェストン師にささぐ」詩の朗読



高千穂町長挨拶

ウェストン祭と自然を守り続けて

田原小学校 五年 吉村 悠萌

「日本アルプスの父」「日本近代登山の父」として知られるウォルターウェストン氏は1890年11月6日に祖母山に登りました。そして1966年に五ヶ所・三秀台にウェストン碑が建立され、1985年からウェストン祭が開催され、今年で35回目になりました。

ぼくはおとし祖母山に登っています。その時はとても天気が良く、実際に登っていくととてもきつかったです。でも、無事、頂上にたどり着くことができました。祖母山の頂上で回りを見渡すと、とてもきれいな景色が広がっていてつかれがふきとびました。

祖母山の周りは、自然がたくさんあるので、これからも守り続けていきたいです。また、祖母山に登りきれいな景色を楽しみたいです。

これからも、ウェストン祭を自然をずっと守り続けていきたいです



吉村 悠萌くんの作文朗読



谷口真樺さん、田上真聡くん 蔵屋、中武会友による献花による点鐘



九州各支部会員

第35回ウェストン祭(交流会・懇親会)

拵 恵子

午後5時から、田原地区村おこし推進協議会主催による交流会が五ヶ所野菜集出荷場で開催された。まず神事があり、その後神楽(河内神楽保存会)や田原地区女性部や子供たちの踊り、本陣太鼓(鳴瀧会)等が披露された。女性部や子供たちの踊りにはおひねりが献上されるなど会場は大いに賑わいをみせた。双石山で出会って結婚された地元の若いご夫婦がキャンプファイアを点火。暖かい炎が会場にともされた。手作りのおでんなどをつまみにかつぽ酒をおいしくいただき、おなかの中もいっぱいとなった。

そうして楽しい時間も過ぎて午後7時ごろに交流会は終了。今年は会員全員が最後まで参加し後片付けを手伝った。地区の方々にも喜んでいただけたのではなかっただろうか。

その後、宿泊施設の公民館で九州各支部との懇親会が行われた。各支部からのお酒や焼酎の提供もあり、杯を交わしながら各支部の現状等情報交換が行われた。全員で肩を組んで地元の山の歌を歌い、のど自慢の歌の披露、さらに皆で炭坑節を踊るなど盛り上がりを見せた。翌日の登山もあることから午後9時過ぎに閉会した。



参加者全員で山の歌合唱



記念山行・祖母山 国観峠

紅葉の中ウェストンの足跡をたどる

川越 政則

ウェストン祭の記念登山として祖母山に登ることになった。総員18名。朝起きて外に出てみると冷たい風が体を包み込む。周囲を見渡すと雄大な山並みが田原地区、五ヶ所全体を見守っているようだ。公民館を8時45分に出発。途中の道路もきれいに整備されていて紅葉も麓まで下りて来ている。一の鳥居に着きそこで車を降り、北谷登山口まで歩いて行った。駐車場は既に車がいっぱいであった。前泊した人たちのようそこには県外ナンバーの車もあった。

9時32分に登山開始。全員の体調を見守りながら、1合目、2合目と杉、ヒノキの林の中を樹木の醸し出す澄んだ香りに元気を貰いながら快調な足取りで登って行った。途中の1合目、2合目の標識を注意して見ていくと数字が記されている。それは1段階の数字であり、その距離が示されている。その間隔502メートルが一区切りになっていると気が付いた。長年の疑問が解けちよっただけ利口になったような気分になった。5合目辺りから足元の落葉が深まりその中をサクサクと音を立てながら登っていく。両側にはケヤキ、黄色モミジ、緑のカシなど鮮やかな美しい景色が疲れを癒してくれた。千間平で休憩して出発。7合目、8合目まで登ると紅葉はまばら、時期は過ぎていた。約1時間で国観峠に到着。今日の目的地はここ迄ということになり、食事、記念写真を撮り下山開始。

下山路は一の鳥居登山口に降りていく。このルートは昭和40年過ぎから使われなくなった。水場が涸れ、小屋も無くなったので北谷ルートに変更されたと記憶している。今回は今年「全国高校総体」が開催され整備されたので、そのルートを下山することになった。少しは改善されているかと期待したがそうでもなかった。急登の下りを転げるようにして下山した。午後2時58分に一の鳥居に全員無事到着してほっとした。

〈コースタイム〉

公民館出発8:45—北谷登山口より登山開始9:32—千間平出発11:08—国観峠到着12:04/国観峠出発12:37—一の鳥居到着14:58—公民館出発15:30—ヤマダ電機駐車場着18:30

〈参加者〉

拵恵子・久峯慧子・谷口敏子・服部澄子・橋口三枝子・蔵屋とよ・中武照子・*関谷克子(一般参加)・荒武八起・日高研二・谷口菊美・武田芳雄・服部岩男・畑島良一・四宮林三・平田五男・川越政則・日向祥剛(北九州支部)

待望の山小屋泊 10月19日-20日

四宮林三

全国支部懇で登る双石山の山小屋へ宿泊したいという願いがやっと実現した。総勢8名。3名は九平登山口から、5名は小谷登山口から山小屋へ向かう。我々3名のチームは頂上を越えて午後4時過ぎに山小屋へ到着。5名のチームも時間差なく着いた。今夜は雨になるという天気予報どおりに、山小屋にたどり着いた時には雨がポツポツ落ちてきた。今夜の宴の為に美味しい肉を清武の石川精肉店で買い求め、その他の食品や調味料、装備は清武のコープで買い揃えた。

小屋は2階建てになっており、1階は囲炉裏と、寝袋で寝られるように、階段を上がって2階は睡眠用の造りになっている。灯りは個人持参の電灯と薪の灯りで、囲炉裏には焼き肉用の金網が用意されていた。持ち寄った材料での寄せ鍋、焼いて食する牛肉などを肴にしてビール、焼酎、日本酒などを飲みながら、それぞれの山の思い出を語り合ったりしながら、和やかな充実した時を過ごした。

翌朝は囲炉裏や1階、2階の床、柱などを綺麗に拭き掃除をし、昨夜使った薪は、小屋の周りの枝木を切って所定の置き場所を満杯にした。次の利用者の為の岳人のマナーである。小屋を出る時少し雲っていたが、2階からの眺めは山の木々の向こうに宮崎の街が見えて素晴らしい景色だった。山岳会に入会し双石山に初登山した時から、いつの日かこの山小屋に泊まって宮崎の街を眺望する日を希望してきたが、それが叶い皆への感謝の気持ちでいっぱいである。

〈参加者 8名〉

前原満之・荒武八起・日高研二・武田芳雄・多田周廣・畑島良一・四宮林三・川越政則



双石山 山小屋 出発の朝

生涯学習フェスティバルin宮崎2019
～第25回宮崎中央公民館まつり

11月23日-24日

日高 研二

当イベントは、宮崎市教育委員会の主催で「集い・学び合い・結び合う 中央公民館」～祭りの主役はあなたです！～をスローガンとして毎年開催される。

開催前の11月17日(日)の午後1時、宮崎市民プラザにおいて役員・関係者それぞれ山岳活動等写真を持ち寄り、7枚の写真パネルを概ね作成し、最終的に荒武支部長がパネルを自宅に持ち帰られ、最終的な仕上げをしてもらった。

参加団体は45団体で、山関係では当山岳会と宮崎山岳会の2団体が参加。一般入場者は昨年度と比較すると雨天等による天候の影響かと察せられるが、若干少ないように見受けられた。

公民館の3階にある会場の奥の一面に、写真パネル(支部定例山行、グループ山行、第35回ウェストン祭、自然保護活動など)を展示して、当山岳会の活動状況をアピールした。多くの来場者が興味深く見ておられ質問も受けた。

会場での来場者の受付対応等ご協力いただきました会員の皆様 大変お疲れ様でした



今回は6枚のパネルを展示した



来場者にパネルの説明をする川越会員

清掃登山・忘年山行・晩餐会 12月14日

清掃作業

九平登山口8時集合、道路周辺および沢筋斜面の廃棄物を清掃した。道路上のゴミは少ないが、斜面や沢筋には半ば埋もれたゴミが散乱していた。昨年も同様な作業を行ってはいるが、慣れた目で次々と見つけ出す。降雨で土が流され頭を出すゴミも多くあると考える。指定のゴミ袋で6袋を收拾し9時に終了した。

<参加者16名> 拵恵子・清水弘子・清家順子・谷口敏子・多田登美子・服部澄子・橋口三枝子・荒武八起・末永軍朗・谷口菊美・酒井保男・多田周廣・櫻木勉・弓削達雄・畑島良一・橋口光博

忘年山行

次年度の全国支部懇談会・記念山行のルート確認及びエスケープルート検討を兼ね、塩鶴登山口から登った。小谷ルートは樹木が伐採されていたが、塩鶴ルートは植林され幼木が視界を遮ることなく周囲が見渡せる。多少下草があるが、良い小径である。空池、大岩から第二展望所まで昇り、帰路は「谷ルート」を下った。エスケープルートとして利用できることを確認した後、「象の墓場」に立ち寄り、以前の思い出に浸った。

畑島 良一

<参加者6名> 拵恵子・服部澄子・橋口三枝子・荒武八起・畑島良一・橋口光博

晩餐会

18時から30名の参加を得て東天閣において晩餐会が開催された。久しぶりに参加された岳友もいて山談義が盛り上がり、瞬間に20時の終了時間となった。



九平登山口駐車場付近で6袋のゴミを收拾した

闘病記「蘇れ 失語症への取り組み」

大西雄二

脳卒中の発病初期の状況を記録に書き留めようとしても、高次脳機能障害や失語症ゆえに初期には書き留めることはできなかった。ようやく文字が書けるようになり、この本で病気としっかり向きあい、どのような関係をとり続けるべきかを見ておきたい。

不幸は劇的にやって来る。なぜ脳卒中にかかったのか。どのような経過をたどり、また後遺症はどこまで続くのか。回復が可能だろうか？年齢や身体からくる遅滞性、意欲、リハビリの回復などがどんなふうに関係しているのか。人によって症状は千差万別である。

私の治療や回復具合を確かめたい。今まで私が経験していない事だらけである。本当に回復したと思われるだろうか？健康な時は健常者の思い上がりで生きてきたように感じる。私は明確な意志を持っていた。必ず仕事に復帰するという明確な意志を。しかしその道のりは苦難の連続であった。一生のうちに不幸な時もある。不幸なときに諦めてはいけない。勇気を持って毎日の暮らしに向かい合い、希望を持って生き続けたい。

自分なりの使命感でこれを書いた。私と同じように病気をし、後遺症が体に残った方を励ましたい。失語症の方は周囲の無理解で精神的にも辛い思いをするのを知っているからである。脳卒中はもう嫌である

が、人の幅を広げる病気といってよい。病気の後、人生の意味が全く違ってしまふ。新たな生の世界を踏み出すようなものである。覚悟を持って生きていたい。あらためて多くの人たちの御助力を頂いた。

ようやく「闘病記」を書けたときの例えようもない喜び。自分の思いを文章に書ける有難さ。自分の精一杯の想いである。表紙の写真の大淀川と水仙の花の「黎明」は夜明けを意味している。最もふさわしいと思った。



エッセイ 心に残る哀愁の山

谷口 敏子

数年前の冬にはめずらしく暖かな二月のある日、岳友から、お化粧山、お姫山、五葉岳、頭布岳、洞岳への縦走を誘われた。この山は祖母・傾山系のほぼ中域にあり、千五百メートル級の山々が連なる。初夏には瑞々しい新緑と花々が美しい私の大好きな縦走路である。まだ山頂付近は残雪があるはずだと一抹の危惧はあったが、それもまた良しと同行することにした。

見立から日之影川を遡り、中村橋から日隠林道を三十分ほど走って洞岳の麓にさしかかった時、岳友が「女郎墓」を見たいと言い出した。

ここ洞岳周辺は、江戸末期、甲州武田氏の遺臣らが浪人として当地に入り鉾脈を発見、以来約四百年にわたる歴史の古い鉾山として繁栄した。鉾山の最盛期は約千人が従事し、抗夫相手の行商人、酒屋、遊女など鉾山にまつわる人間ドラマは史実として今も語り継がれている。

「女郎墓」とは、いつ聞いても哀しい響きを持つ言葉である。私はこの墓がある大吹谷には過去二回訪れたことがあるが、二回共に肌寒い湿っぽい日で谷を吹き抜ける風にも霊気が漂い、鬱蒼と茂る樹々や苔むした墓標を濡らして霧のような雨が降っていた。幸い今日は天気も良く、まだ樹々の芽吹きには早い森は裸木のひろがりのなかに晩冬の明るい日差しが差し込んでいる。冬枯れの大吹谷は夏の間足元に繁っていた草も、沢の水もすっかり枯れ、辺りの明るさにほっとしながら歩いているうちに、前回気付かなかったものを発見して思わず釘付けになった。気付かなかったというよりゆっくりと見る心のゆとりがなかったのかも知れない。

山深き鉾山後の女郎墓

朽ちて苔むす小さな石塚

それは、小さな石を幾つも積み重ねただけの石塚であった。考えてみれば、名もない遊女の名を刻んで墓標を作ってくれたとは考えにくい。前回遊女の墓と思って手を合わせた墓標は、よくよく見ると大方は男性らしい名が刻まれていた。その下流のそこそこに点在している石塚こそ、哀れな遊女たちの墓に違いない。再び故郷へ帰ることも、妻や母になることもなく、喜びも夢も持てずにこの山中に果てた女性たちを思うと新たな痛みが走った。思いを振切るように早々に引き上げ、お化粧山からお姫山へ一気に登った。尾根道はブナやナラの裸木が清々しく、はだら雪の鹿納山、

五葉岳、夏木山、頭布岳などが指呼の間に見渡せた。それにしてもお化粧山、お姫山とはいづ誰が名付けたのであろうか。歩く以外手段のなかった時代、貧しく育った女性たちが幾日もかけて辿り着いたこの尾根道で、身を整え化粧をし見立鉾へと下って行った。その女性たちを偲んで語り草としてこのような山名になったのであろうか。お姫山の尾根道にその由来らしきものを書いた古い立板が置いてあったが、半ば朽ちて文字も定かに読みとれなかった。乾いた喉を水で潤し振り返ると、小さな風呂敷包みを抱えた女や少女たちが、無言のまま山を下っていく幻影を樹の間に垣間見たような気がした。

はだら雪踏みつつ下るたまゆらを

振り投げ見れば風鳴るばかり

女たちの辿って行った踏み跡を今、帰る家があり待っている家族がいる幸せな自分が歩いている。藁草履ではない防水の利いた山靴で下りながら、涙が溢れそうになった。午後の二月の山はやはり冷たい風が吹きはじめ、ぱらぱらと雪が舞いはじめた。寒さがしんしんと身体を包む。

頭布岳の下山口の周辺に、タンナトリカブトの群生地があり、夏には紫色の花房で埋まるが今は白い枯れ花がカラカラと風に鳴っていた。その音が何ともしみしげで哀愁を誘う。しかし、三カ月もすれば、今日辿った縦走路は、薄紅色のボンボリのようなアケボノツツジで染まる。そしてここからさらに下った洞岳には華やかなこの花と対照的に、黄の花芯をほっそりと包む白い一重のヤマシャクヤクが女たちの化身のように、ひっそりとはかなげに新緑の谷間に咲く。その頃になると私は無性にこの花に会いたくなる。ヤマシャクヤクは、この山に果てた女性たちへの鎮魂の花なのかも知れない。

この山に果てし女人の化身とも

ヤマシャクヤクのかげり恋しさ



宮崎の自然 ササユリ

石井 久夫

祖母傾国定公園特別地域に指定されている祝子川源流地帯にある大崩山(1,643m)は露出した花崗岩の表面が風化してぼろぼろに崩れ易いので大崩山と呼ばれているが、その疎林やササやぶ草原の登山道を歩くとあちこちにササユリが生育している。

ササユリは本州中部以西、四国、九州の低山地の草原や疎林に生育する固有のユリで「古事記」によると、神武天皇が後に皇后として迎えた伊須気余理比売(イスケヨリヒメ)を見初めた奈良県の狭井川(サイカワ)のほとりに咲いていたのがササユリで現在でも奈良の卒川(イザリカワ)の三枝祭(サイクサノマツリ)でササユリが奉納されている。

そのササユリは山地草原に生育するユリ科の多年草で鱗茎は卵形白色で径2-4cm、茎は高さ50-100cm、葉は披針形で長さ8-15cmで多くつかずはっきりした柄がある。花は6-7月に茎頂に数個横向きに開く。花被は淡紅色で漏斗形、花被片は倒卵形で長さ10-15cm内片が巾広く先はやや反り返って花粉は赤褐色、そ果は倒卵形で3-4cmである。和名は笹百合で葉がササの葉に似ているのでその名がある。

ササユリはヤマユリのように多数の花は付けず、また一花でもなく十分に成長すると三つ花を付ける。三枝の名はそれに基づいたもので昔からユリは儀式植物として神事に利用され三枝はササユリの事で巫女の舞の際に利用されている。

<メモ>

ササユリ

Lilium japonicum Thunb.

美しい花色をもつ日本特産のユリで和名は葉がササによく似た光沢のある披針形から別名に早百合とも呼ばれ、本州中部以西・四国・九州の山地草原に自生する多年草である。宮崎の分布域は宮崎県植物誌によると大崩山、鬼の目山、他に日向亀崎、南限が権現崎で稀産種である。



ササユリ

Lilium japonicum Thunb.

遠見場山(とんばやま)

永峯 麗子

登り上げし標高一八六メートル遠見場山

二等三角点わが踏みぬ

どのお顔も摩耗しています三葉躑躅
咲く下の千手観世音

三葉躑躅咲く遠見場山観世音
廻り来たりて一万六千六十六歩

ここは海拔二、六メートル海よりの
距離五十メートルと書く島の小学校

いま一度生れたならば破草咲く
この島の小学校の先生になりたし



[事務局だより]

支部行事予定

月別	行 事 名	期 日	備 考
1月	定例山行 大島探索	1月11日(土)	集合場所:宮崎産経大第二駐車場、 出発:8時
1月	全国支部懇談会準備	1月18日(土)	
2月	全国支部懇談会準備	2月15日(土)	
3月	諸塚山 山開き	3月1日(日)	前日2月29日(泊)
3月	全国支部懇談会準備	3月14日(土)	

支部会務報告(10月-12月)

月 日	事業・行事	開催場所	人員	備考
10.3	第247回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	21	
10.3	支部役員・委員長会議	宮崎市中央公民館	8	
10.12	ときめき家族登山	島の浦、遠見場山	#	台風のため中止
10.19-20	双石山	宮崎市	8	山小屋泊
10.31	臨時役員・委員長会議	宮崎市活動センター	10	
11.2-3	第35回宮崎ウエストン祭	高千穂町五ヶ所	18	九州各支部から28名参加
11.7	第248回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	21	
11.7	支部役員・委員長会議	宮崎市中央公民館	7	
11.17	第25回中央公民館まつり準備	宮崎市活動センター	7	
11.23-24	第25回中央公民館まつり	宮崎市中央公民館	18	
11.29	家庭裁判所補導委託登山	双石山	9	
12.5	第249回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	22	
12.5	支部役員・委員長会議	宮崎市中央公民館	7	
12.7	全国支部連絡会議	東京京王プラザ	2	
12.7	全国年次晩餐会	東京京王プラザ	2	
12.14	双石山清掃登山	双石山	16	
12.14	支部晩餐会	宮崎市東天閣	30	
12.20	臨時役員・委員長会議	総務委員長宅	9	

グループ山行等(届け出分)

月 日	山 座	代 表 者	人 数	備 考
10.27	久住山	橋口三枝子	4	
11.8	比叡山	橋口三枝子	5	
11.8	丹沢山系	畑島良一	4	麗山会

事務局からのお知らせ

1. グループ登山の届け出の厳守：グループ登山の届出が完全ではないようです。グループで登山される時は、必ず事前に登山計画書を作成し事務局に提出して下さい。
2. 来年5月の全国支部懇談会に向けて、年明けから本格的に準備を始めます。「支部行事予定」に示すように、そのための準備日を定めております。皆様のご協力、何卒宜しくお願い申し上げます。

編集後記

庭のロウバイの蕾が膨らみ、2019年も残り少なくなった。こんなに暖かくていいのだろうか。例年、花が1つ2つ開いた頃に正月を迎える。支部報作りに係って、寄せられる文章の行間には、それ以上の熱い思いが秘められていると感じられて来た。これからも沢山読みたい、一緒にそこに立ちたい。

令和2(2020)年5月16、17日は日本山岳会全国支部懇談会が宮崎で開催される。誠意を以って全国の山友をお迎えしたい。支部会員全員で、日向の明るさで、元気で、力を合わせて。(多田)

公益社団法人 日本山岳会宮崎支部報 第70号

発行責任者：荒武 八起

編集委員：久峯 慧子(責任者)、拵 恵子、谷口 敏子、
多田 登美子

事務局：都甲 豈好

〒880-0926 宮崎市月見ヶ丘5-20-4

Tel, Fax 0985-53-0150

E-mail：toko150@miyazaki-catv.ne.jp

口座：ゆうちょ銀行 記号17330-2 番号09336371

名義人：(社)日本山岳会宮崎支部